



# 中丹教育支援センターだより

京都府立中丹支援学校

令和5年10月3日発行

## 「夏季研修講座」への御参加ありがとうございました。

7月31日（月）に京都府北部特別支援教育夏季研修講座を行いました。大阪医科薬科大学LDセンターの奥村智人先生に「見え方に課題のある子どもたちの理解とその支援」と題し、オンライン講座と動画配信のハイブリッド形式で多くの方々に参加していただくことができました。講演内容は視力の発達や読み書きの困難さがある子どもたちのアセスメントや指導・支援、視機能・視覚認知の発達について専門的な視点で分かりやすく解説していただきました。また研修講座の中では時間がとれないため、インターネット上の解説動画を御紹介いただきました。御指導御支援にお役立ていただければと存じます。



### 〈 講座の感想アンケート 〉

- ・外遊びが子どもの体だけでなく視覚にもいい影響があることが分かりました。
- ・日々関わっている子どもたちの見え方や読み方について改めて考える機会になりました。教えていただいたトレーニングなどの方法をヒントに2学期以降取り組みたいです。
- ・視機能・視覚認知の発達について詳しく丁寧に教えていただき、眼球運動、両眼視、視覚情報処理、目と手の協応等様々な視点でアセスメントが必要なことが分かりました。
- ・合理的配慮をどうしていくか考えることができました。見え方に課題のある子どもへの支援の必要性とアセスメントの重要性を感じました。適切な配慮を行っていきたいです。
- ・困り感を感じている子どもたちに対して早期に気づき対応していくことや支援ツールを活用することで改善に向けて取り組んでいきたいです。
- ・鉛筆の持ち方の発達について教えていただき、発達を考慮することが大切だと感じました。今後の指導に生かしていきたいです。
- ・ピントを合わせるだけでエネルギーを使い、他の活動にエネルギーが回らないことを初めて聞きました。視力の発達や視機能への理解が深まったので見え方に困難さを抱えている子どもへの対応を考えたいです。
- ・目と手の連動が弱いと感じる子どもが学級に在籍しているので見る力だけでなく指先のトレーニングについても考えて実践できるようにしたいです。
- ・視覚認知に弱さのある児童生徒には、認知につながるように指導していく必要性を感じました。斜線が認知できるまでは文字の習得が難しいので繰り返し練習するだけでなく斜線を捉えられているか把握したいです。
- ・音読することが難しい場合にはカラーフィルターを活用する等して合理的配慮を行っていきたいです。

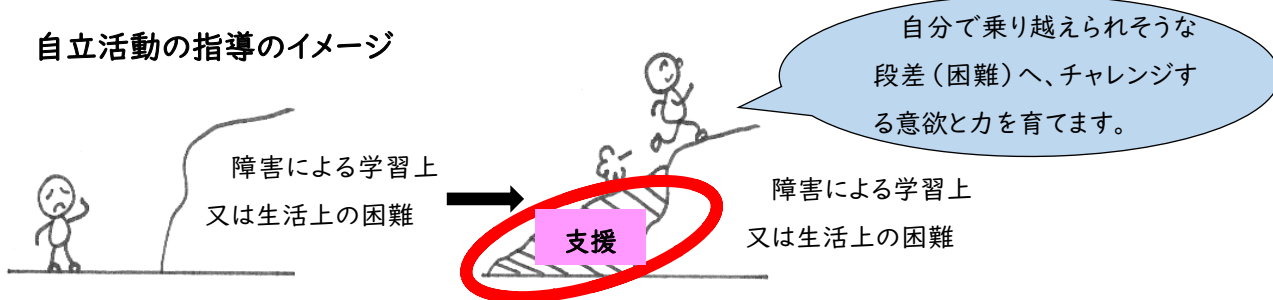
感想をお寄せいただきましてありがとうございました。今後の研修講座に生かします。



— 自立活動の指導について —

自立活動の目標は「個々の児童生徒が自立を目指し、障害による学習上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養い心身の調和的な発達の基盤を培うこと」と、特別支援学校学習指導要領に挙げられています。障害によって学習や生活において生じる様々なつまづきや困難を改善克服するため、「健康の保持」「心理的な安定」「人間関係の形成」「環境の把握」「身体の動き」「コミュニケーション」の6区分27項目から必要な項目を組み合わせ、関連させて一人一人の実態や配慮事項を加味し「何を指導の課題とするか」「指導目標や指導内容をどう設定するか」を検討し指導内容を考えます。本校で取り組んでいる自立活動の指導事例を御紹介します。

自立活動の指導のイメージ



特別支援学校で行っている自立活動の指導の事例①(一斉授業)

中学部3、4組では、毎朝、活動着に着替え、タオル等を使った全身運動に取り組んでいます。繰り返し取り組むことで手首の柔軟性が高まり、腕や肩も大きくのびやかに伸ばしたり回したりすることができるようになり滑らかに身体を動かすことができるようになってきました。身体を動かすことで覚醒をあげること(健康の保持)、モデルの動きを模倣し身体イメージを高めること(身体の動き)、曲に合わせて歩いたり走ったりする動きを通して、体勢を切り替えたり姿勢を変換したりすること(環境の把握)、ボール転がしリレーを通して友達と協力して活動することができること(人間関係の形成)を目標に、それぞれねらいをもって一斉での授業に取り組んでいます。

— 環境の把握「タオル体操」 —

タオルの両端を持ち、手本を真似て運動します。腕を上げて伸ばしたり、洋服を干す動作に見立てて手首を上下にぱたぱた動かしたり、左右に身体をひねったり、またぎ越したりする等、タオルを用具として扱い、日常の様々な状況に合わせた身体の動きがスムーズにできることを目指します。



特別支援学校で行っている自立活動の指導の事例②(個別の授業)

利き手、非利き手が協調して機能することで両手を使うことができるようになり、身体を中心線を越えて手を操作することができるようになると斜めの線を書いたり、身体をねじってボールを投げたりすることができるようになります。個別の学習では、個々の実態を考慮して課題に取り組みます。楽しく挑戦するよう、教材教具を工夫し選定しています。

引用参考文献 京都府作業療法士会 特別支援教育 OT チーム(ホームページより諸資料、チェックリストをダウンロードできます。)

文字の構成要素(縦横斜めの線、丸)を見て書きます。

絵を見て輪ゴムを棒にかけます。動きを合わせてとらえます。

形のマッチングです。両手を動かして微調整しながらはめて感覚をつかみます。

数字のシール貼りで集中力や見る力をトレーニングします。

発達の視点も加味し、子どもたちを的確にとらえ、適切な時期・段階で力をつけることで、より豊かな人生を送れるよう合理的な支援、配慮されることが大切です。

